

大大阪記念博覧会 ～「大阪・関西万博」百年前の博覧会～

高木 昌之

【目的】

「2025年日本国際博覧会」、通称「大阪・関西万博」が、2025年（令和7年）に大阪市此花区の夢洲で開催される。2021年（令和3年）に1年延期されて開催された「東京2020オリンピック競技大会」がコロナ禍で残念ながら不発に終わった分、コロナ後の経済活性化の起爆剤として大いに期待される場所である。

ちょうど百年前にも似たような状況があった。1923年（大正12年）の関東大震災で東京が壊滅的な打撃を受けたその2年後の1925年（大正14年）、大阪市は周辺の町村を合併し、人口・面積で日本一、人口では世界第6位の大都市となった。「大大阪」と呼ばれる繁栄の時代を迎えたのである。

この「大大阪」の誕生を記念して開催されたのが「大大阪記念博覧会」であった。

そこで、「大阪・関西万博」を契機に、今後の大阪が大大阪時代を凌ぐ発展と飛躍をすることを願い、大阪が一番元気であった百年前に開催された「大大阪記念博覧会」について掘り下げてみたいと考えた。

【内容】

今回の研究を始める前に、たまたま古書店で1925年（大正14年）に発行された『大大阪記念博覧会誌』を入手した。当時の博覧会でこれだけきちんとまとめられた記録誌が存在すること自体珍しい。これは研究にとっては諸刃の剣で、その分、新たな発見が難しくなるのだが、それを覚悟の上で、記録誌には記載されていない博覧会に関する新たな事実を探し求めた。

私が入手した『大大阪記念博覧会誌』は、当時の大阪毎日新聞社長、本山彦一が北海道大学に寄贈したものであった。その縁も感じ、博覧会そのものに加え博覧会を主導した本山彦一についても迫ることにした。

【結果】

記録誌に記載されていない事実のひとつとして、閉幕後の展示物の行方がある。直後には活用された形跡があるものの現存が確認できるのは赤松麟三画「大坂築城図・大坂落城図」のみである。一方、パビリオンについては閉会后素早く撤去されたことが記録誌に記され、残念ながら再利用が論じられた様子はない。そこで、この原状復帰のスピードと閉会半月後に行われた皇太子殿下行啓との関係性を検証してみた。

また、この博覧会の実現、そして成功にあたっては、大阪毎日新聞社長である本山彦一の存在が大きいことを実感した。抜群の宣伝力を発揮して入場者数189万人を記録。黒字化しその利益を全て公益事業に寄附したのは見事であった。

1. 「大阪・関西万博」の百年前に開催された「大大阪記念博覧会」

2025年（令和7年）の「大阪・関西万博」が開催されるちょうど百年前の1925年（大正14年）4月1日に、大阪市は第2次市域拡張を実施して周辺の東成郡と西成郡の44町村を併合し、南は大和川から北は新淀川を越えて兵庫県境まで拡大した。人口はそれまでの132万人から一挙に211万人と増加し、人口199万人の東京市を抜き、日本最大かつ世界第6位の都市となった。

その「大大阪」の誕生を記念して、天王寺公園と大阪城を会場とし同年3月15日から4月30日までの47日間にわたり開催されたのが「大大阪記念博覧会」である。

天王寺会場では、既存の勸業館を本館、大阪市民博物館を参考館、天王寺公会堂を娯楽館とし、その他、機械館、廉売館、パノラマ館や、大陸館、台湾館、朝鮮館などの植民地パビリオンが建ち並んだ。会場建築も印度のアグラ・タジマハールの東洋文化を徴するサラセン式が採用された。本館には「水の大阪」「文化の大阪」「工業の大阪」「商業の大阪」「交通の大阪」「劇と音楽の大阪」など、「27大阪」というテーマをつくり画期的な展示方式を採った。参考館には赤松鱗作の大油絵による「大大阪俯瞰図」を掲げ、大大阪を形成すべき参考資料を展示した。

大阪城会場には、天守台跡に「豊公館」を建て、大阪夏冬の役、征韓の役や豊公遺臣の資料などを展示した。現在の大阪城天守閣は2021年（令和3年）に90周年を迎えたが、この「豊公館」の盛況こそが、のちに昭和天皇即位の記念として大阪城天守閣を復興する構想につながったと言われている。

その他、大阪市内の大丸、高島屋、三越、十合、松坂屋の五大百貨店には協賛館が設けられた。

2. 社長・本山彦一の手腕

主催の大阪毎日新聞社にとって、この博覧会の表向きの開催趣旨は「大大阪」の誕生を記念することにあっただが、一番の目的は「大阪毎日新聞」が1925年（大正14年）2月27日に1万5千号に達することを世間に知らしめることにあっただ。当時、大阪毎日新聞社長であった本山彦一は、その手段として博覧会の開催を思いついたのである。だが「大阪毎日新聞」の1万5千号記念というだけではインパクトに欠ける。成功に導くにはもっと強力な大義名分が必要であった。そこにタイミングよくピッタリと填まったのが「大大阪」の誕生であった。



大阪市設南霊園に残る本山彦一の墓

本山は、1853年（嘉永6年）に熊本藩士の子として生まれ、藩校時習館で学んだ後上京、福沢諭吉に師事。租税寮、兵庫県勤務を経て、1883

年（明治 16 年）に時事新報社入社。その後藤田組支配人を経て 1889 年（明治 22 年）に「大阪毎日新聞」に入社。1903 年（明治 36 年）から 1932 年（昭和 7 年）に死去するまで同社の第 5 代社長を務めた。大阪で有力な言論人として新聞社を経営する傍ら、広く殖産興業や農業振興、皇陵巡拝運動、慈善活動などを主催した啓蒙的財界人であった。生前は堺市の羽衣に住み、墓は大阪市設南霊園（阿倍野墓地）にある。

本山の判断は正しく博覧会の入場者数は 1,898,468 人に及び、それまでの“博覧会は赤字”という概念を覆し総予算 47 万円に対し 14 万 5 千円もの黒字となった。剰余金はそっくり大阪市、大阪府、第四師団、財団法人大毎慈善団へ寄付したのもいかにも本山らしい

3. 素早く撤去されたパビリオン

天王寺会場の主要パビリオンは既存の建物をそのまま転用したものであったが、大阪城会場の豊公館は仮設とは言え立派なつくりであった。だが再利用の是非が論じられることはなかった。1925 年（大正 14 年）4 月 30 日の閉会后直ちに出品物を紀州御殿にあった師団司令部に移し、翌 5 月 1 日から取り壊しに着手。撤去は迅速を極め僅か 15 日間で原状に復された。

短期間で原状復帰を果たしたのは、手際が良かったこともあったが、それ以上に急がなくてはならない理由があったからだと推察する。それが同年 5 月 19 日の皇太子殿下（後の昭和天皇）来阪である。皇太子殿下の行啓は大阪にとって博覧会に続く一大イベントであった。

当日の皇太子殿下のスケジュールは、京都を朝に立たれ、9 時 40 分に大阪駅到着後、天王寺公園の奉迎式場、大阪府立商品陳列所、大阪城、大阪府庁、大阪市庁を巡り、15 時 55 分には大阪駅を立たれ京都に戻られるというものであった。大阪城では天守台に登られ、雨上がりの煤煙立ち上る商工都市「大大阪」をご展望された。「大阪毎日新聞」はこのお姿を拝し「仁徳天皇の昔が偲ばれる」と書いている。これに先立つ 5 月 6 日には、第四師団小倉参謀長らによる下検分も行われている。つまり、皇太子殿下が天守台にお登りになるまでに豊公館の撤去を完了しておかなければならなかった訳である。

行啓にあたり、天王寺公園では京都御所の紫宸殿を模った奉迎式殿が大林組により短期間で建築されたが、これは公園の中ほどにある運動場に建てられたもので博覧会会場とは関係ない。ただ天王寺会場の取り壊しも素早く、同年 5 月 10 日には完了している。

4. 展示物の行方

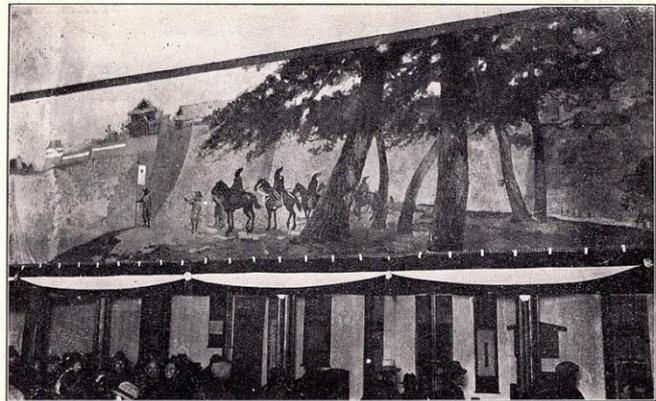
前述の行啓の際、皇太子殿下がご訪問された大阪市庁では、「大大阪記念博覧会」で本館や参考館に出陳され好評を博した展示物が活用され、大阪築港、市立運動場、水道水源地等の模型や、仁徳帝時代からの歴史的遺跡や遺跡地図、写真および明治天皇、大正天皇の大阪行幸に関する資料が台覧に浴することになった。

また、「大大阪俯瞰図」など博覧会のために製作された参考資料数件は、閉会后に市民博物館へ寄附されている。

ただ、これらを含めた展示物の行方についてはほとんど分からない。

そんな中で、「豊公館」に展示されていた長さ 120 尺 (約 36 メートル) にも及ぶ洋画家・赤松麟作画の「大坂築城図・大坂落城図」だけは、現在も大阪城天守閣に所蔵されていて時折展示もされている。

1925 年 (大正 14 年) 2 月 24 日付の「大阪毎日新聞」には、赤松は「大大阪俯瞰図」を新たに制作中で、全壁面を飾る夏冬の陣 (「大坂築城図・大坂落城図」のことと思われる) については時代考証を基に下絵を完成させ近く本絵に取り掛かる旨が記されている。1993 年 (平成 5 年) に大阪市立美術館で開催された



豊公館に展示された「大坂築城図」(筆者所蔵)

『赤松麟作展』では「大坂築城図・大坂落城図」の制作年は 1924 年 (大正 13 年) とされているが、この「大阪毎日新聞」の記事や博覧会の準備委員会が設置されたのが 1924 年 (大正 13 年) 12 月 11 日であることを勘案すれば、制作年は 1925 年 (大正 14 年) とするのが妥当であろう。

5. 終わりに

2021 年 (令和 3 年) 10 月から翌年 4 月まで放送されている NHK 連続テレビ小説「カムカムエヴリバディ」のタイトルには「- Since 1925 -」と付記されている。これは 100 年のファミリーストーリーが、上白石萌音さん演じる最初の主人公、橘安子が日本のラジオ放送と同じ 1925 年 (大正 14 年) 3 月 22 日に誕生したところから始まる、という意味である。まさに「大大阪記念博覧会」の会期中に日本でラジオ放送が始まったという訳である。

国内では普通選挙法や治安維持法が制定され、海外ではムッソリーニが独裁宣言した 1925 年 (大正 14 年) は、ある意味、この後、世の中が大きく変わっていく節目の年であった。既に「空飛ぶクルマ」の実用化などが話題となっている 2025 年 (令和 7 年) が、良い方向に変わる節目となってくれることを切に願いたい。

◆参考文献等

「大阪毎日新聞」(1925) 大阪毎日新聞社、『大大阪記念博覧会誌』(1925) 大阪毎日新聞社、川上富蔵編著『毎日新聞販売史 戦前・大阪編 (限定版)』(1974) 毎日新聞大阪開発、「大阪春秋 (季刊) 第 38 巻第 3 号通巻 140 号」(2010) 新風書房、「大阪春秋 (季刊) 第 48 巻第 4 号通巻 181 号」(2021) 新風書房、『赤松麟作展-没後 40 年記念 近代大阪の洋画家-』(1993) 大阪市立美術館、橋爪紳也監修『別冊太陽 日本のこころ 133 日本の博覧会 寺下勅コレクション』(2005) 平凡社
国立国会図書館の電子展示会「近代日本人の肖像」本山彦一
<<https://www.ndl.go.jp/portrait/datas/569/?cat=63>>、
関西大学なにわ大阪研究センター「なにわ大阪と本山彦一」
<<https://www.kansai-u.ac.jp/naniwa-osaka/research/2018-02.html>>、
大阪市統計書
<<https://www.city.osaka.lg.jp/toshikeikaku/page/0000095336.html>>、
NHK 連続テレビ小説「カムカムエヴリバディ」<<https://www.nhk.or.jp/comecome/>>